

### 第3回 アウトリーチカフェ報告書

作成者 小井塚ななえ

日時：2014年12月16日（火）17:00～19:00

場所：一般財団法人地域創造

ゲストスピーカー：磯絵里子（ヴァイオリン）

進行：児玉真

#### 【内容概略】

##### 1. 趣旨説明

おんかつのアーティストたちが、お互いのアウトリーチを見る機会が少ないという現状がある。そうした中で、アーティスト同士が交流したり自身のアウトリーチについて公開して意見をもらうような場を設ける必要があるのではという問題意識からこのアウトリーチカフェが始まった。今回で3回目となるが、「〇〇研修会」という形ではなく、構えずに交流したり考えを出し合える空間を設定すべくカフェスタイルにしている。対象は、おんかつOBアーティストやフォーラムアーティストなどで、新しい情報を仕入れたり、意見を交換したりできるような場として活用して頂きたい。過去のアウトリーチカフェでは、中川さん（ピアノ）や田村さん（ピアノ）にゲストスピーカーを務めていただき、今回は2002年、2003年の登録アーティストであった磯さんに依頼し、お引き受け頂いた。磯さんは、登録期間が終わった後も多方面で活躍されているアーティストである。

##### 2. 磯さんによるプレゼンテーション

登録アーティストに応募したきっかけ

2000年頃ベルギーから帰国して日本での演奏活動について考えていた時期に、2期の登録アーティストであった長谷部一郎さん（チェロ）と出会い、おんかつのことを知る。この活動は何だろうという興味がわき、オーディションを受け合格。それまで、コンサートで話すということを経験したことがなかったこともあり、初めてのプレゼンテーションでマイクを持つ手がブルブルと震えていたことを今でも鮮明に覚えていると振り返った。何もわからない状態で3期のおんかつがスタートし、経験を重ねる中で、アウトリーチとは何か、何をしたいのかということが少しずつ明確になっていった。アウトリーチにはまるきっかになった初期のアウトリーチの経験

初年度は、2カ所で活動をし、どちらもトリオでの訪問であった。ソロの指名がなかったことやまだ経験がなく自分自身にノウハウがない状態だったため、初年度は冒険ができない1年でもあったと振り返った。

初めてのおんかつは、兵庫県で実施し、そこで同じく兵庫県の和田山の藤田さんに出会ったことで活動が更に展開していくこととなった。その出会いによって田島クラシックパークという和田山を中心とした事業にアーティストとして参加することになり、初期の大きな経験のひとつとして活動して行くこととなった。

磯さんは、おんかつアーティストとして活動することによって、同期のアーティストや、全国の文化施設の担当者との出会いがあり、それが現在まで継続していることを挙げ、非常に重要な2年間であったと述べた。磯さんがアウトリーチの面白さや奥深さを感じるに至った要因として大きく以下の3つが挙げられる。

#### ① アーティストからの影響

ヴァイオリンはソロであってもピアニストと一緒に活動するだけでなく、トリオやデュオなど他のアーティストと関わる機会が多い。そのためその時々でアーティストのノウハウや考え方を見ることができるだけでなく、アーティストの熱意を目の前で感じお互いに刺激しあう経験をしている。例えば、共演したピアニストとして中川さんと田村さんを挙げ、二人から受けた刺激について語った。中川さんは現代曲や即興演奏をふんだんに取り入れたプログラムを展開しており、共演した際には、ワークショップを一緒にやったり、即興に巻き込まれたり、突然その場の雰囲気で行進が変わっていったりと鍛えられた面もあったと振り返った。また田村さんについては、追究してこだわってひとつひとつの内容を創り込んでいく部分を挙げ、アウトリーチに対して自分はどのように向き合うのか、創っていくのかを考えるきっかけにもなったと語った。

#### ② 自分のプログラムを探し、創っていく過程

おんかつアーティストとしての2年を終了した後は、ソロ、デュオ、トリオなど様々な編成でアウトリーチをするようになり、また小学校などの教育機関だけでなく、美術館など色々な場所でのアウトリーチを依頼されるようになったことでプログラムも多様な形態を準備し、自身のでっぱんプログラムが構築されるようになる。またコンサート形式だけでなく、ワンポイントレッスンをしたり、ワークショップ形式に挑戦し、その過程で、子どもたちから感想を聞く、最後に合奏をする、聴き手の周りを演奏しながら練り歩くといった必ず取り入れる柱が固まっていく。

#### ③ ソロでの活動

福岡の筑後でのアウトリーチがソロとして行ったこともあり、印象に残っている。

最初のアウトリーチは、川の中州にある公園で大きな楠の下で樹木医と児童と演奏家がお散歩をしながら話したり音楽を演奏したりするという企画で、外でヴァイオリンを弾くという初めての経験をした。

樹木医さんの人柄や話の内容も非常に暖かいもので、さらに自身の演奏に対して小学校2年生の児童が目の前で「風と合奏しているみたいだね」と呟いたことが非常に印象的で、心に今も残っているとエピソードを語った。そのアウトリーチでは他にも絵本の読み聴かせと演奏など様々なことに挑戦することができ、「アウトリーチは音楽を聴く人にとっても、そして自分にとってもいいものなのかもしれない」と感じる瞬間があったようだ。

磯さんにとって、色々な人と共演する中で、刺激を受けたり方法を取り入れたりする機会に恵まれたことが重要なことだったと振り返り、是非、お互いのアウトリーチを合ったり意見を交換する機会をフロアのアーティストにも持ってほしいと語った。

### 3. 質疑応答

Q1：磯さんの中で、リサイタルをするような演奏活動とアウトリーチとがどのように共存しているのか

A1：アウトリーチもそうでない仕事も本番であることに変わりはなく、本番は多ければ多いほどいいと考えている。家で細かく練習することも重要だが、人前で演奏することは本当に勉強になる。それを日本で演奏活動を始めるようになった初期の頃にアウトリーチを通してたくさんできたことは自分にとって力になった。また、色々な人と共演して、企画からリハーサル、本番とご一緒することで刺激も受けたし、ひとりでは出ない発想が芽生えたりする機会も多かった。

自身のリサイタルを開く際にも、アウトリーチで得た発想を広げるようなことをやってみたりと互いに繋がっている部分もたくさんある。

Q2：演劇や美術（絵）とコラボレーションをしたりする際に、例えば、絵の BGM のような扱いになるといったように、音楽がメインではなくサブのような扱いになってしまう場合があり、それを嫌がるアーティストもいる中で磯さんはそうした葛藤や障壁はなかったのか

A2：私の場合はなかった。絵のみを鑑賞する場合と、音楽のみを鑑賞する場合、そして一緒に楽しむ場合の3パターンとも鑑賞者が感じることはまったく違うと考えている。だから絵を見ながらということ音楽がサブになるという感覚は持っていない。た

だこの絵にどのような曲が合うか、聴衆と音楽と絵が溶け合うにはどうしたらいいかをじっくりと考えることに多くの時間を費やしたことは確か。またこのような場合に必ずしも聴衆が皆「絵に合う」という感覚を共有する必要はなく、個々の感性や嗜好にゆだねられるという考えは常に持っている。

**Q3:** プログラミングの際に自分の感性と他人の意見とをどのくらい反映させて構築していくのか。

**A3:** 今のところ自分の演奏したいと思う曲を選ぶようにしている。それを一回他者に聴いてもらって意見を聞いて実際にプログラムに入れるかを検討する。

**Q3:** 例えば絵とコラボする場合は？

**A3:** 自分のインスピレーション、例えば色からのイメージとかで曲を選択する

フロアからの質疑応答では、アイスブレイキングについても話が盛り上がっていた。初めて集まった集団を温めるだけでなく、アーティストのテンポに巻き込んでいく導入部分に使うこともでき、色々な手法があることが紹介された。実際に後だしジャンケンで最近のアウトリーチで行ったアーティストからその時の子どもたちの状況が紹介された。

**Q4:** アウトリーチを積み重ねると自分の中でてっぱんプログラムができてきて、反応のいい曲などがわかってくると、なかなか新しいことに挑戦しにくくなっている自分がいる。磯さんは、プログラムをどのようにしているか

**A4:** 共演者によっても違うけれど、自分のソロの部分は時間によってもう曲が決まってしまう部分はある。トリオの場合はメインコンサートの曲を人前で練習してみたいという気持ちもあってそれを持ってくることも多い。そうすると初出しの曲はなかなか入れることができない。トリオだとてっぱんプログラムはあります。ソロでもやはり朝イチから心配なく弾ける曲とかあるし、経験を積んで、てっぱんプログラムができてくることは、当然だし大切だと思う。

この質問については、てっぱんプログラムはコーディネーターや共演者、聴衆の反応等、いろいろな意見や経験の中でできたものだから、これを自分自身で最初から創ることに不安があることは理解できるという意見も出された。しかし、どこかでチャレンジしていくことが重要であり、少しずつ（1曲新しくするなど）変えていけるような挑戦意識をもつこともアーティストとして必要である。また打楽器など、ポピュラーな曲が

少ない楽器はなかなかてっぱんプログラムを創ることが難しいという意見も出され、委嘱作品や生きている作曲家の作品をてっぱんにしていくなど、楽器と人と結びつけることを意識して選曲していくことでてっぱんプログラムが生まれてくるのではんばいかという考えに至り、アウトリーチカフェは終了した。